

◆講座名	江戸のネコ歩きー江戸の事件と文学
◆開催日（回数）	10月2日、16日、11月6日、20日、12月4日
◆曜日	土曜日
◆時間	13:20～14:50
◆定員	30名

◆講座内容

第164回の直木賞・西條奈加『心（うら）淋し川』（集英社）は、江戸時代の千駄木を舞台にしています。当時は無名で心淋しかったこの地も、今は人気の下町。「谷根千（谷中・根津・千駄木）」の一角として多くの散歩客を集める、ネコの聖地。のんびりとネコが横たわる、谷中銀座の夕焼けだんだん。猫カフェを横目に三崎(さんさき)坂を登りきると、永久寺。そこにはネコ好きで知られた猫々散人こと、仮名垣魯文の墓もあります。

長引くコロナ禍のなか、引きこもりがちで気も減入りますが、こんな時にこそ必要なのは物見高い江戸っ子の好奇心としなやかなネコの感性。一見遠く見えながらも、意外と身近な江戸。最新の研究動向や文化的話題を盛り込みながら、江戸人の興味をかき立てた5つの事件を取り上げ、それがどう伝えられ、文学化されたかをたどることで、江戸文化の本質に迫ります。

① 人気歌舞伎役者と大奥女中のスキャンダル、絵島生島事件。② 祐天寺ゆかりの祐天上人が折伏した累（かさね）事件。③ 大阪の大富豪淀屋辰五郎をどん底に落とした關所(けっしょ)事件。④ 震災、感染症、外圧などが現代と相似する、幕末の諸事件。⑤ 諸説乱れる、ご存じ赤穂浪士の討ち入り事件。

専門的な研究をふまえても出来るだけ分かりやすく、古地図や浮世絵などの画像も駆使し、豊かで奥行きのある江戸の世界を堪能したいと思います。

権威ある全米図書賞（翻訳部門）を受賞した多和田葉子『猷灯使』（講談社）、柳美里『JR上野公園口』（河出書房新社）はともに東日本大震災から三年という文学的発酵時間を要しました。文学の本質はたっぷりと時間をかけて人間の尊厳（ディグニティ）に迫る点にありますので、すぐには役に立たないと思いがちです（村上春樹『雑文集』）。ただコロナ禍の中、かけがえのない一日一日を心豊かに過ごすために、それが不可欠であることを再認識した方も多いのではないのでしょうか。

本講座は「江戸のドレスコード1、2」の続編です。コロナ禍の昨秋はドキドキしながらの開催でしたが、受講生の方々の熱意で充実したひとときを持つことができました。これまでの受講生はもちろん、初めての方も大歓迎です。一回完結方式ですので、お休みになっても支障はありません。お気軽にご参加下さい。昨年同様にネコ歩き(文学散歩)のコースもご紹介しますので、お役立て下さい。新図書館の建設ははじまり、大学にも活気が戻りつつあります。黄葉の銀杏並木で、お会いできることを楽しみにしています。

◆目標、重点を置く学習内容

すぐには役に立たないけれども、少しだけ人生を豊かにしてくれるもの。「教養」というのはそうしたものかもしれません。社会全体が幼児化している印象ですが、「江戸」に回帰し、奥行きのある大人の世界に触れることで、コロナ禍で痛んだ心身をリフレッシュしたいと思います。

◆受講対象者

どなたでも可能です。はじめての方はもとより、最新の研究結果を加味することで予備知識をお持ちの方にもご満足いただけるような講義を心がけます。

◆参考図書(講師推薦図書・購入は任意)

毎回、プリントを用意します。参考文献も講義の折に、入手しやすいものを適宜ご紹介します。

◆受講に際しての注意事項など

- ・最少催行人数を設けております。最少催行人数に達しなかった場合には、講座を中止させていただくことがございます。
- ・講座の録音・録画・写真撮影は、ご遠慮ください。
- ・講義中は、携帯電話の電源を切るかマナーモードに設定してください。教室内での通話はご遠慮ください。
- ・ワクワクするような好奇心を持って受講して下さい。

◆講座スケジュール（各回の講義予定）

回	日程	内容
1	10月2日	「大奥を震撼させたスキャンダル―絵島生島事件」。正徳4年（1714）1月、大奥の実力者絵島が人気の歌舞伎役者生島新五郎との酒宴に興じ、門限を破った一件。これが政権を揺さぶる大事件となったのは、なぜでしょうか。国会図書館に残された記録『江島実記』や、それを小説化した浮世草子『今源氏空舟』（1716）、『西鶴伝授車』（同）を通してその真相に迫り、外からはうかがい知れない「大奥」という特異な空間と政治的影響力について考えます。 大奥の通用口は平河門。最寄り駅は東京メトロ東西線竹橋駅のそばです。北の丸公園、日本武道館、靖国神社、九段坂。千鳥ヶ淵に代表されるごとく、この周辺は桜の名所。桜といえは絵島が流された高遠（長野県伊那市）も見逃すことができません（生島は三宅島）。少し足を延ばし、来年こそは満開の桜を堪能したいですね。
2	10月16日	「エクソシストのメディア戦略―祐天上人と累(かさね)事件」。若者が群れる流行の発信地、祐天寺。この寺に名を刻む祐天上人は、浄土宗総本山増上寺のトップにまで登り詰めた高僧。そんな彼が、38歳の寛文12年(1672)に遭遇した羽生村(今、常総市)の累事件。それは夫と右衛門に殺された累と、先代の妻に殺された助の霊が、与右衛門の娘菊に憑依した一件でした。 悪霊に立ち向かい、除霊に成功した祐天。その経緯を克明に記す、『死霊解脱物語聞書』（元禄3年(1690)）。祐天からの聞き書きとする本書で「江戸のエクソシスト」（高田衛）としての名声は高まり、支援者を大奥にまで拡げて、祐天は異例の出世を遂げることになります。絶妙のメディア戦略。西鶴『好色一代男』（1682）を契機に活性化した出版界。宗教界をも巻き込む、元禄期のメディアの活況ぶりを展望します。 祐天上人ゆかりの祐天寺はもとより、水辺の風景が一変した浜松町から、増上寺。また常総市（旧羽生村）周辺のネコ歩きコースもご紹介しします。
3	11月6日	「江戸セレブの光と陰―淀屋辰五郎事件」。クルーザーどころか、淀川沿いの一等地に金銀財宝のうなる48もの蔵を所有し大阪淀屋橋に名を遺す、超の付く大富豪。代々続く老舗の御曹司として、何不自由なく育った若旦那辰五郎を奈落に突き落とした關所(財産没収の上、追放)事件。一見どこにでもあるセレブの転落譚ですが、この一件には裏があります。 それをほのめかす記録(『元正間記』『月堂見聞集』)を読み直し、その本質が歌舞伎化(『けいせい金の淀鯉』、『けいせい蓮の糸』)、小説化(『長者機嫌袋』、『栄大門屋敷』)される過程でどう変質し、江島其磧の名を決定的にした八文字屋本の代表作『風流曲三味線』に結実するのかを考えます。裏のテーマは、『風流曲三味線』の光と陰。 京都、神戸にはさまれ、今一つ人気のない大阪ですが、秋の観光シーズン、大阪をネコ歩きしてみませんか。お初天神(『曾根崎心中』)や西鶴の墓など人気の散歩コースをご紹介します。
4	11月20日	「ネコ好きのジャーナリストが記した、江戸のパンデミック」。震災、感染症、オリンピックをめぐるゴタゴタ。わたしたちを悩ます、三重苦。実は今から約160年前の安政期（1854～60）にも似たような試練がありました。ペリーの開国要求に割れる国論、安政地震、コレラ騒動。当時20代で駆け出しの戯作者だった仮名垣魯文は激変する江戸の街をネコのように歩きまわり、震災を扱う『安政見聞誌』や『安政箇労働（コロリ）流行記』で新境地を拓きます。 江戸の笑いとネコのしなやかさで激動の幕末・維新时期を生き抜いた、軟派のジャーナリスト。そんな魯文の足跡にコロナ禍を生きるヒントを探る一方、ネコの聖地の散歩コースをご紹介しますと思います。
5	12月4日	「もうひとつの、忠臣蔵」。12月は「忠臣蔵」の季節。元禄15年(1702)12月14日、吉良邸に討ち入った赤穂浪士。事件を仕組んだ歌舞伎は即刻禁止されましたが、江戸人はひるみません。危険を犯しても挑む価値のある、最強の話題（ネタ）。周到な安全弁に満ちた、初期の「忠臣蔵」。それらは、現今のものと大きく違っていました。浄瑠璃（近松『兼好法師物見車』『碁盤太平記』）、歌舞伎（『鬼鹿毛無佐志鏝』『太平記さざれ石』『硝後太平記』）、浮世草子（『傾城武道桜』『傾城播磨石』『けいせい伝受紙子』）などの珍しい作品を紹介し、制約を逆手に取る江戸人のしたたかな表現方法を学びたいと思います。 義士の墓のある高輪泉岳寺周辺はもとより、吉良邸跡のある両国回向院周辺のネコ歩きも紹介します。新橋の切腹最中もお薦めです。

◆補講日

12月11日

◆講師紹介

篠原 進 青山学院大学名誉教授。専門は日本近世文学、メディア論。主な著書は『新選百物語』（監修・白澤社・2018）。共著『ことばの魔術師 西鶴』（ひつじ書房・2016）。「二つの笑い―『新可笑記』と寓言」（『国語と国文学』2008年6月）。コメンテーター「ヒストリア 井原西鶴」（NHK 2012 年3月）。同「BS歴史館 井原西鶴」（同2012年5月）。
--